

「中国杭州市域における宋代史跡ならびに“天竺進香”調査報告」について

石川重雄

2007年8月23日から28日にかけて、中国杭州市域内に点在する南宋太廟遺址・南宋皇城遺址・八卦田(南宋皇帝が毎春自ら大豆・茄子・糯稻・紅辣椒・四季豆・緑豆等を植えて勸農をすすめる籍田)などの宋代史跡や浄慈寺・靈隱寺・上天竺寺・中天竺寺・下天竺寺・岳飛廟などの寺廟の現況を確認した。また宋代を濫觴とする上天竺観音の信仰・香会、その信仰を母体とし杭州周辺域農民層が西湖周辺の寺院を巡拝する“天竺進香(朝山進香)”(明清時代頃に組織化)の現在に至る様子を調査し、当初の目的である予備的取材を果たした。現在行われている巡礼は当地で“西湖香市”とも呼ばれ、巡礼の時期や信仰対象により“天竺香市”“下郷香市”“三山香市”に三分されている。初期の“天竺進香(朝山進香)”の流れは若干方向性が変わりつつも“西湖香市”に継承されている。旧時、明清時代頃には「花朝」(旧暦2月12日)から端午(同5月5日)にかけて北は山東省、南は江蘇省・浙江省の無錫・蘇州・湖州付近の農民が船団を組んで集散していた。やがて毎年3回、すなわち観音の誕辰日としての旧暦2月19日(2月13日～19日の一週間)、観音の得道日としての同6月19日(6月13日～19日の一週間)、観音の昇天日としての同9月19日(9月13日～19日の一週間)に定期化し、今日におよぶ。今年2008年の“天竺香市”は、新暦になおすと3月26日(3月20日～26日)、7月21日(7月15日～21日)、10月17日(10月11日～17日)の3回行われることとなる。宋代に興隆した上天竺寺の観音信仰を起点とする“天竺進香”についての学際的な総合研究は中国国内においてもなされておらず、今後継続する調査活動によって中国前近代における巡礼社会史研究の進展が期待される。

記

日 程；2007年8月23日～8月28日

人 員；高橋弘臣(愛媛大学准教授)、石川重雄(東洋大学非常勤講師)

斯松梅(現地ガイド)

協力者；何忠礼(浙江大学教授・杭州市社会科学院南宋史研究中心主任)

馬安東(浙江大学教授・外国語言文化与国際交流学院日本語語言文化研究所長)

調査地及び訪問先；

8月23日(木)；西湖、蘇堤、河坊街 等

8月24日(金)；雷峰塔、浄慈寺、西冷印社 等

8月25日(土)；浙江省博物館、中国茶葉博物館 等

8月26日(日)；岳飛廟、靈隱寺、上天竺寺、中天竺寺、下天竺寺

8月27日(月)；南宋太廟遺址、南宋皇城遺址、八卦田、官窯博物館(工事中)

西湖博物館、南宋歴史文化研究中心

8月28日(火)；西湖、蘇堤

【上天竺寺と上天竺観音】

上天竺寺は西湖の西側に位置し、下天竺寺・中天竺寺とともに三天竺寺と称される。上天竺寺の創建については南宋・潜説友『成淳臨安志』巻80「上天竺靈感観音寺」に「後晋天福四年、僧道翊結廬山中、夜有光、就視得寄木。命孔仁謙、刻観音像。曾僧勲從洛陽持古仏舍利来。因納之頂間、妙相具足。錢忠懿王、夢

白衣人求治其居。王感寤、乃即其地創仏廬、号天竺看經院。云々」とあり、五代・呉越王錢俶の仏教振興に与るものであった。ここにみえる観音像を刻した孔仁謙は、当時、明州・杭州一帯の仏像を作製した仏師として知られる。「天竺看經院」の号・呼称は宋代に入ると「靈感觀音院」（嘉祐末）、「院を寺に改む」（乾道3年）、「上天竺靈感觀音教寺」（嘉定5年）、「廣大靈感觀音教寺」（理宗中）と変遷をみる。宋代における上天竺寺の住持歴代を一瞥すると天台の山家・山外論争以後主流となる山家派、四明知礼の系統が配置されていることが指摘できる。宋代を通じて核となる住持は、北宋期では南屏梵臻、弁才元浄、慈弁従諫、慧覚齊玉、南宋期では慧光若訥、柏庭善月、仏光法照であり、ことに南宋期になると皇帝との結びつきも強固となる。朝廷、士大夫、科擧の受験生、富豪、庶民にいたるまで幅広い上天竺觀音への信奉がみられ、そのにぎわいの一端を示すものとして、『咸淳臨安志』巻80(南宋・志磐『仏祖統紀』巻45)に「勅錢塘天竺觀音院、歳度一僧以奉香火。朝廷每遣中使・謁者、致香幣、歳給大農錢作仏事、而公卿・貴人致幣祈祷者、旁午於道」（北宋・神宗・熙寧5年）とみえ、南宋・呉自牧『夢梁録』巻19にも「奉仏者有上天竺寺光明会、俱是富豪之家、及大街鋪席施以大燭巨香、助以齋費供米、広設勝会、齋僧礼懺三日、作大福田」と富豪民に支えられた「光明会」の存在が確認される。じつはこの上天竺觀音の信仰は日本へも「天竺靈籤(おみくじ)」として伝播している。『仏祖統紀』に「天竺靈籤」の記事がみえているが、宋代に流行った「天竺靈籤」（鄭振鐸『中国古代版画叢刊』所収）は明清時代に受け継がれ、同時に日本へも伝わり『天竺靈感觀音籤頌百首』（寛文2年）などの関連書が刊行された。岩手県浄法寺町の天台寺に伝えられる「天竺靈籤」籤筒に応永16年(1409)の銘文があるというから、伝来時期は室町時代までは遡ることができるようである(中村公一『一番大吉』大修館書店)。

宗室の南渡以後、上天竺寺の寺格は教院五山の第一位として位置づけられ、同じく禪院五山第一位の徑山寺とともに並び称されるようになる。また国都臨安の大刹として国内外に影響をもつことになる。上天竺寺の白雲堂が臨安下の禪・教・律の各寺院をたばね、住持銓衡會議「期集」のセンターになっていたことも、その影響力の一つにかぞえられる(『仏祖統紀』)。この「期集」関連史料は少ないが、詳細を伝える史料に高麗寺尚書省牒碑文がある。南宋・趙升『朝野類要』巻5「期集」(王瑞来点校『朝野類要 附朝野類要研究』中華書局)にも「擧に応ずる士人、共にその利便を陳べんと欲すれば則ち、一所在を指定し、諸人を会集し、定議し以てこれを申明す。行都(=臨安府)の諸大寺院の頭主を差注するに、亦た諸頭主を集め、相い聚(とも)にこの人を定議し、行檢、保明、申差するも亦たこれを期集と謂う」と説明される。このほか一昨年、本寺の御許可のもと東福寺文書(京都国立博物館寄託)の調査を行った際、南宋時の住持銓衡會議「期集」の記事を確認している(近く発表予定)。

もう一つの影響力として国家祭祀を挙行する祈祷道場、觀音大士としての側面がある。『咸淳臨安志』巻80に「咸平初、郡守張去華以早迎大士至梵天寺致禱、即日雨、自是過水旱、必謁焉」とあり、北宋時代に上天竺觀音を梵天寺に迎えて早(ひでり)の祈祷をしたことを伝える。きわだった靈感(感応)を示す観音像を別処に迎え入れ祭祀・祈祷をおこなう「迎請」は南宋時代になると頻繁に行われ、『宋会要輯稿』礼一八をみると杭州(臨安)上天竺寺の観音像が主対象となり、祈穀、祈雨、祈雪、祈晴、禱災異、多岐にわたっていたことが知られる。

当時、上天竺寺の経済基盤としての寺莊田の規模も注目される。『宋会要輯稿』等によれば、寺莊田は杭州(臨安)のみならず蘇州(平江府)・秀州(嘉興府)・湖州に分布している。

寺莊田の規模は徑山寺と拮抗し、税制への弊害を論じられるほど税の蠲免(けんめん)を受けていた。このように上天竺寺は北宋より興隆し、南宋初に金軍の侵入により殿宇は焼失したが間もなく再建された。その後、元の順宗時に焼失し、至正4年(1344)、南宋の宰相賈似道の孫と伝えられる東溟恵日により復興されている。明代に至ると、太祖・英宗により厚く保護され、清代では、康熙5年(1666)、雍正9年

(1731)、同治3年(1864)の重建をへ、乾隆26年(1751)乾隆帝より「法喜寺」の額を賜った。

【明清時代の“天竺進香”】

明清時代の“天竺進香”については、明・張岱『陶庵夢憶』巻7西湖香市に「西湖香市、起於花朝、盡於端午。山東進香普陀者日至、嘉湖進香天竺者日至、至則與湖之人市焉、故曰香市。然進香之人市於三天竺、市於岳王墳、市於湖心亭、市於陸宣公祠、無不市、而獨湊集於昭慶寺、昭慶寺兩廊故無日不市者。三代八朝之骨董、蠻夷閩貊之珍異、皆集焉。云々」とみえ、旧暦の「花朝」から「端午」にかけて杭州周辺から進香客が集まり、三天竺寺、岳廟、湖心亭、陸宣公祠、昭慶寺等で香市(マーケット)が開かれる様子を伝えている。

もう一つ明末清初の文人、范祖述『杭俗遺風』にも“天竺進香”の内容が記されている。正確に言えば、“天竺香市”“下郷香市”“三山香市”が説明され、既述した通り“天竺進香”の流れは方向性を変えて“天竺香市”“下郷香市”“三山香市”に受け継がれている。“天竺香市”は周辺地域から集まる進香客もさまざま、年3回上天竺観音の誕辰・得道・昇天日に参集し、三天竺寺、岳王墳、湖心亭、陸宣公祠、昭慶寺等を回遊し市を立てたり交易をする。“下郷香市”の主体は浙江の養蚕農民の男女で、村々で船団を組み、幟(のぼり)を立てやってくる。松木場で船を停泊させ陸路、城内では城隍山各廟、城外では三天竺寺、四大叢林(靈隠・昭慶・聖因・浄慈寺)を巡る。ただ上天竺寺は別格で大蠟燭を供えるという。“三山香市”は三天竺山(寺)、小和山(玄天上帝)、法華山(東嶽大帝)を目指し、郷紳から大家富戸の婦女らが主体となる。このように旧来の“天竺進香”はあくまでも上天竺観音を中心にしつつ、さまざまな進香(巡礼)形態に変容・分岐していったことがうかがえる。

【現代杭州寺院と“西湖香市”】

今回杭州の地に足を踏み入ると、西湖の風情以上に近代化の波という現実には驚かされた。西湖の地下を高速道路が通り抜けていたとは。杭州は周辺にマンションが林立し不動産売買が活況を呈する、まったく中であつた。中華人民共和国成立後、中国共産党及び人民政府は宗教の自由をうたつた。1953年中国仏教協会が結成され、1956年杭州市仏教協会も正式に成立した。靈隠寺再建は杭州仏教復興の嚆矢としての意味を持ち、1953年より再建・修復が認可されている。これには周恩来首相の意向もはたらいたという。その後文化大革命をへ、杭州の仏教も痛手を受けた。かつて中天竺寺が時計工場になるなど寺院の接収もあつたが、いまは三天竺寺ともに復興している。日本との縁も深い浄慈寺、宋代には華嚴のセンターとして機能した高麗寺(慧因寺)なども復興を遂げている。しかし、香市でにぎわいのあつた昭慶寺は学童の施設として変貌した。靈隠寺から三天竺寺にいたる地域は、杭州市の「靈隠景区総合整備事業」として開発がすすめられ、同時に「恢復天竺香市及上香古道」もすすめられている(「浙江新聞」1996年等)。今回調査時においては上天竺寺を含め諸処で工事がおこなわれていた。観光資源として“西湖香市”“天竺香市”もその中に位置づけられている。今日、観音大士の生誕日頃になると沿道を数百台の観光バスが埋めつくすという。上天竺観音の出来からおよそ一千百年の星霜をかぞえ、“天竺進香”という歴史的所産がどのような過程をたどり現在に至るのか。今後の調査に期する所である。

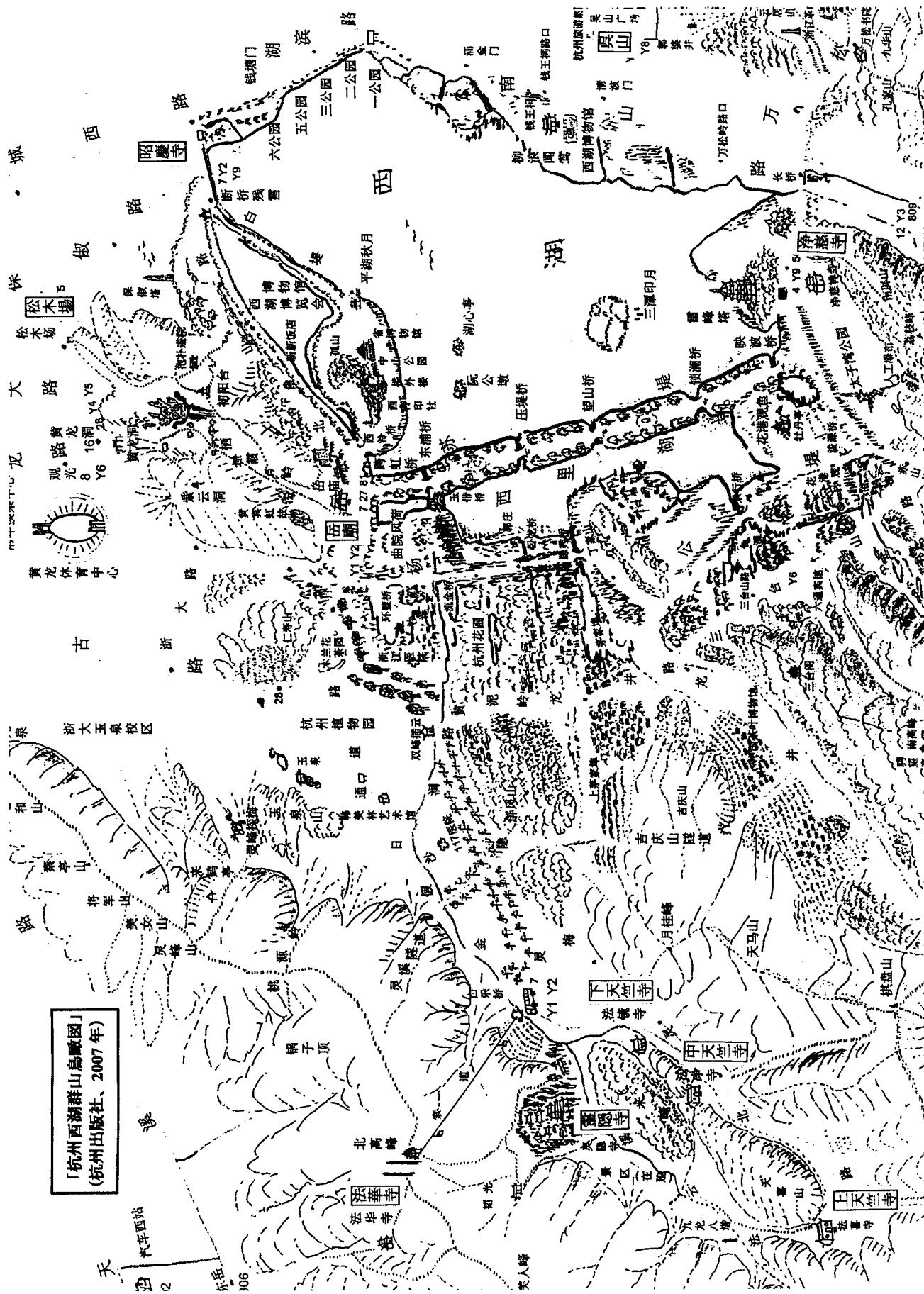
〔主要参考文献〕

- 冷 曉 『杭州仏教史』 杭州市仏教協会、1993年（再版、上・下2冊、百通出版社、2001年）
- ” 『杭州近代仏教史』 杭州市仏教協会、1995年
- ” 『天竺史話』 上天竺法喜講寺販売、1998年
- 杭州市地方志編纂委員会 『杭州市志』 第2巻民情風俗篇第6章民間信仰第1節「香市・廟会」
- 徐 一智 「明代上天竺講寺観音信仰之研究」 『法光学壇』 2003年第7期
- ” 「明代上天竺講寺所獲得的捐獻之研究」 『史匯』 2003年第7期
- 菅原昭英 「中国の寺院はどう復興しているのか—1985年秋の浙江省」 『中国佛蹟見聞記』 7、駒沢大学中国佛敎史蹟参観団、1986年
- 鈴木智夫 「明清時代江浙農民の杭州進香について」 『史鏡』 13、1986年
- 石川重雄 「宋代杭州上天竺寺に関する一考察」 『社会文化史学』 21、1985年
- ” 「宋代上天竺寺と住持僧」 『立正史学』 61、1987年
- ” 「宋代勅差住持制小考—高麗寺尚書省牒碑を手がかりに」 『宋代の政治と社会』 汲古書院、1988年
- ” 「宋代祭祀社会と観音信仰—「迎請」をめぐる」 『柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族』 汲古書院、1993年

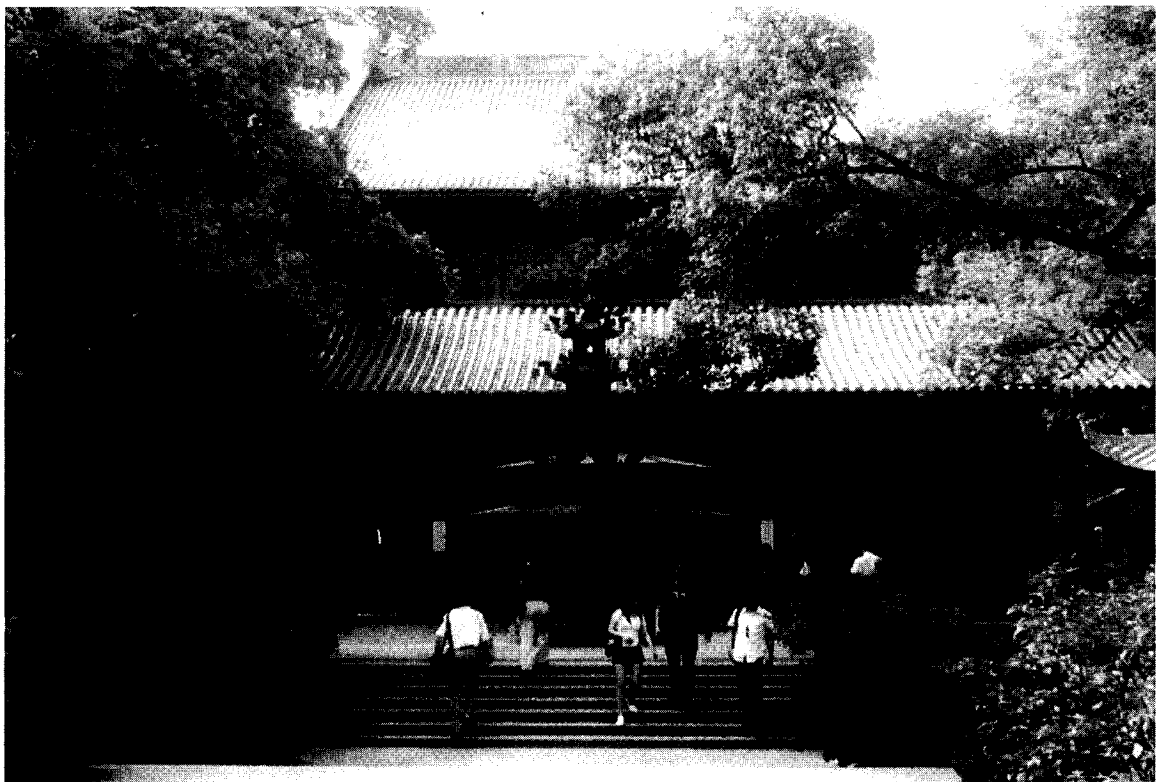
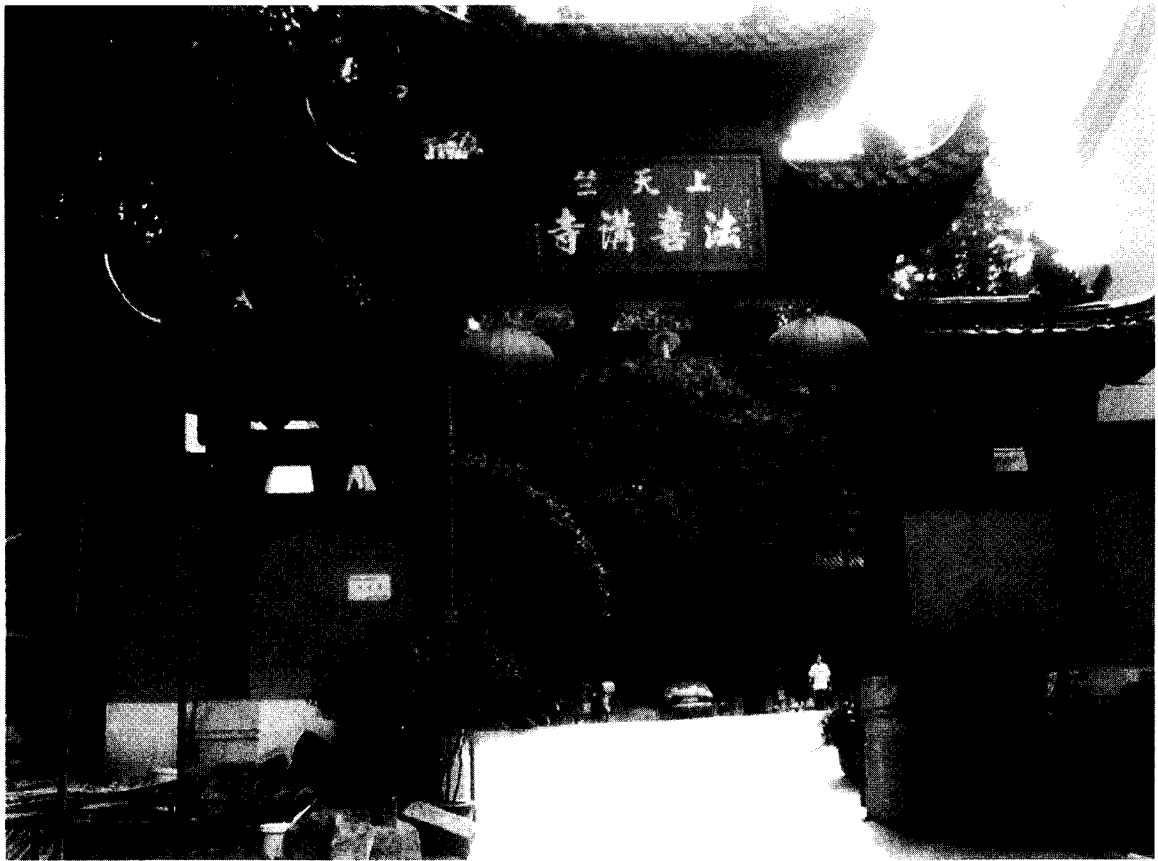
〔付記〕

例年になく猛暑の折、何忠礼先生には大学院生を連れ我々と行動をともにし、岳廟、靈隠寺、三天竺寺など各所を案内していただいた。馬安東先生には調査を行うにあたり、諸々の手配や貴重なアドバイスをいただいた。ここに記して謝意を申し述べたい。

なお“天竺進香”については、本年11月開催される杭州での学会“中国南宋史国際学術研討会”にて報告、論文提出予定である（中文論題「上天竺観音与“天竺進香”—從宋代到現代」）。



「杭州西湖群山鳥瞰圖」
(杭州出版社、2007年)



【上段・上天竺法喜講寺 山門／下段・圓通宝殿】2007年8月26日 筆者撮影
圓通宝殿内に“天竺進香”の由来となる神木観音像（上天竺観音）が安置されている。